



# 中国西南地方・ナシ族モソ人の歴史文化村鎮保護に関する考察：雲南省永寧郷者波中村、里格村を事例に

馮, 旭  
山崎, 寿一

---

(Citation)

神戸大学大学院工学研究科・システム情報学研究科紀要, 5:1-12

(Issue Date)

2013

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81005264>



## 中国西南地方・ナシ族モソ人の歴史文化村鎮保護に関する考察 —雲南省永寧郷者波中村、里格村を事例に—

馮 旭<sup>1\*</sup>・山崎 寿一<sup>1\*</sup>

<sup>1</sup> 工学研究科建築学専攻

(受付: February 26, 2013 受理: June 11, 2013 公開: June 17, 2013)

キーワード: 歴史文化村鎮、ナシ族、整備事業、観光開発事業、集落空間構造、保護手法

本稿は、中国西南地方の雲南省永寧郷のモソ人（ナシ族の1グループ）の伝統的集落を対象に、①モソ人の集落・住居の伝統的空間構造の特徴を明らかにすること、②近年の居住環境整備事業、観光開発に伴う集落・住居空間の変容、住民意識の変化を明らかにすること、③上記の居住環境、観光開発の二つの事業を評価し、伝統的空間構造に基いた歴史文化村鎮の保護手法について検討を加えることを目的に研究を進めた。

### 1. はじめに

#### 1.1 研究の背景・目的・方法

##### (1) 研究の目的

本稿は、中国西南地方（重慶市、四川省、貴州省、雲南省）における歴史文化村鎮<sup>注1)</sup>の保護計画に関する一連の研究の1つである<sup>注2)</sup>。本稿は、中国西南地方の少数民族の集落空間構造の研究と伝統的集落の保護に関する研究の二つの側面をもっており、以下の研究課題を設定して考察を進めた。

- ①雲南省永寧郷（麗江市寧蒗彝族自治州に位置する15の郷の一つ）に居住するナシ族モソ人<sup>注3)</sup>の集落・住居の伝統的空間構造の特徴を明らかにすること、
- ②近年の居住環境整備事業・観光開発に伴う集落・住居空間の変容、住民の伝統文化・社会制度に対する意識の変化を明らかにすること、
- ③上記の二つ事業を伝統的空間構造との関連、住民意識の点から評価し、モソ人の歴史文化村鎮の保護計画について検討を加えること

##### (2) 研究対象の選定

中国の西南地方の歴史文化村鎮保護においては、独自の文化と居住様式をもつ少数民族集落の存在が重要な位置を占めている。そこで、本稿では、特に少数民族が多く居住する雲南省の中から、独特な母系社会を維持してきた雲南省麗江市寧蒗彝族自治県の奥地高原地帯に居住するナシ族のグループであるモソ人の伝統的な集落を取り上げることにした。

今回の研究では、雲南省寧蒗県政府（永寧郷の上級政府）の協力を得て、2010年9月下旬に寧蒗県政協の和建華主席、寧蒗県宣伝部の熊天兵部長、永寧郷武装部の熊世軍部長（モソ人、地元に住居、30歳代）とともに予備調査を進めた。調査の第一段階では、集落別のモソ人の比率、農業従事人口の比率、収入、観光開発の時期について行政の基礎資料を入手、分析した。第二段階では、熊

世軍部長の管轄地区である永寧郷の主要なモソ人の集落の予備調査を行った。その過程で、近年郷政府の指導の下で、①居住環境の向上・生活の近代化への対応を目指した居住環境整備事業（以下、整備事業と略す）、②自然環境・民族文化の保護及び観光業の発展を目指した開発事業（以下、観光開発と呼ぶ）が進められ、伝統的集落の保護が急務の課題となっていることがわかった。

上記の予備調査結果を基に、本稿では近年居住環境整備事業を導入した者波中村と、観光開発事業を導入し、

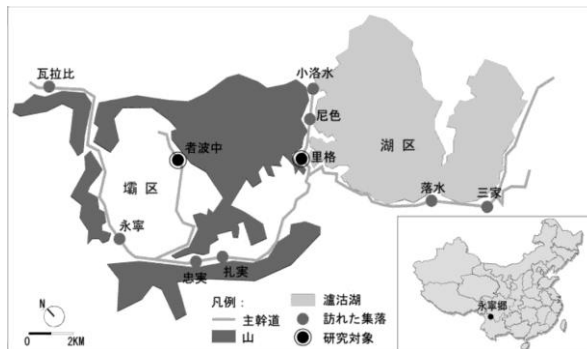


図1 雲南省麗江市寧蒗彝族自治州永寧郷の調査集落

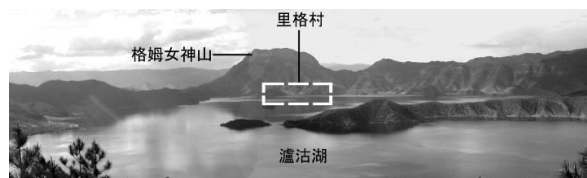


写真1 湖区・里格村の位置



写真2 壩区・者波中村の位置

省級の歴史文化村鎮の申請を目指している里格村を研究対象に選定して本調査を進めることにした。

## 1. 2 既往研究の動向と本研究の特色

本稿の研究対象とする少数民族は、一般的にナシ(納西)族と呼ばれる民族の一グループである「モソ(摩梭)人」である。モソ人は、東部ナシ人として西部人と大別されることがあり、雲南省永寧瓜別・博瓦・項脚等に居住している<sup>注4)</sup>。モソ人は、現在でも母系社会の伝統が維持されており、世界中の学者の関心を集めている。またその民家形態は、累木式(校倉造)民家として独特の形態と構法をもっている。

既往研究では、主に民族学分野では生活習慣や社会環境面、人類学分野では母系氏族の生活様式面に着目して、ナシ族の起源、伝統的文化・芸術の発展、母系氏族の生活習慣の精緻な研究成果が発表されている。<sup>注5)</sup>

建築学分野では1980年代以降、ナシ族の独特な居住空間、及び母系氏族の日常生活との関連性が取り上げられ、『雲南民居』(1986版、2009版)<sup>注6)</sup>等の著作が発刊された。日本では、浅川滋男らによって1990年代に貴州省・雲南省の住居について現地調査が行われ、その成果は『住まいの民族建築学』(1994)<sup>注7)</sup>・『雲南省ナシ族母系社会の居住様式と建築技術に関する調査と研究』(1996)<sup>注8)</sup>として発表されている。また井上えり子はナシ族の伝統的住居に関して他の少数民族との比較から精緻にその特徴を明らかにしている<sup>注9)</sup>。

これまで、モソ人の社会文化・生活様式や伝統的民家に関する研究の蓄積は多いが、集落を対象とする研究は十分とはいえない。

中国では国土全域における経済成長、都市化が急速に展開しており、中国西南地方の少数民族集落でも同様である。それに加え美しい伝統的な集落景観、自然景観を残す少数民族の集落は観光化、近代化に対する対応も迫られている。このような状況にあつてモソ人の歴史文化村鎮の保護研究はようやくスタートした段階といえる。

## 2. 研究対象地域の概要

モソ人が居住する雲南省永寧郷は(図1)、湖区(写真1)と壩区(写真2)に分かれ、そのなかからさらに6つの行政村、72の自然村に分かれている<sup>注10)</sup>。永寧郷には美しい高原や瀘沽湖の自然景観が残されているため、1986年に第二回の国家級自然風景名勝区<sup>注11)</sup>に指定された。また、モソ人の居住地として、独特な社会文化、美しい伝統的集落・住居が残っており、中国でも有名な少数民族居住区の1つと認識されている。

湖区では、1980年代末から観光化が進むに従って、住民が自発的・無計画な開発を進めてきた。そのため、伝統的景観が失われ、瀘沽湖の水質も汚染されるという問題が生じている。それに対し、2003年より瀘沽湖管理委員会と永寧郷政府が里格村を対象として、本格的に瀘沽湖の生態環境の保護と観光開発事業を導入している。

現在、里格村には30世帯が住んでいる。かつては農業と漁業を主な生業としていたが、最近では観光業が中心に

かわっている。観光開発で他民族の経営者の参入もみられるようになっており、モソ人以外の民族と通婚する住民も現れている。その結果、妻間婚(走婚とも呼ばれる)<sup>注12)</sup>と一夫一婦制の両方が存在し、社会文化への影響も表れている。更に、観光開発によって集落・住居空間に著しい変容がある。

一方、壩区は、観光化が進んでおらず、伝統的な農業、牧畜業、林業と生活様式が維持されてきた。しかし、2000年代初期から、永寧郷政府の指導の下で者波中村をモデルに、住民の生活を改善することを目指した集落・住居の整備が行われ、集落・住居空間が変化している。

者波中村は、かつて永寧地区を司った領主(土司)が居住していた中心集落であり、今も壩区の中では経済的に恵まれた集落(平均収入が約2300人民元/年、農業人口は26%)となっている。集落は、27世帯から構成され、住民は全て妻間婚である。

## 3. 整備事業による 者波中村の住居・集落空間の変容

### 3. 1 モソ人の伝統的な住居・集落空間の特徴

今回の現地調査では、全30戸のうち27戸の住宅プランを採取し、居住者から部屋の呼称、使い方についてヒアリングした。また整備事業導入前後の住宅や住まい方の変容についても調査した。

以下では整備前の者波中村の伝統的な住居・集落空間の特徴を整理する。

#### 3.1.1 伝統的な住居空間の特徴

住居空間について、家族人数が安定しており、改造も少ない伝統的な住宅の典型例として1920年代に建てられた巴塔の住宅(図2-②)を例にその特徴を整理した。

図面採取と居住者ヒアリングから、モソ人の住居空間の最も重要な特徴は、神・人・畜が共存していることであり、住居内に信仰・生活・生産の場所が整っていることがわかった(図2-①)。この特徴が伝統的なナシ族の住居空間が維持されているか否かを判断する主要な基準となる。

累木式構法を特徴とするナシ族住居の配置は、主屋(写真3-①)、経堂(写真3-②)、居室棟、畜舎が庭を囲むことになっている。経堂はチベット仏教の神の空間として、信仰に関する活動や家族からでた僧侶が修行を行う場所である。主屋、庭、居室棟は人の空間であり、日常生活の主要な場所となっている。畜舎は畜の空間であり、住居に隣接する菜園とともに生産の場所となっている。

モソ人の住居にとっては最も重要な空間と考えられるには家長であり、家族を管掌する祖母が住む主屋のなかの主室である。ここでは、家族の日常生活(食事、団らん、接客)が営まれ、成人式や葬式等の重要な儀式を行う場所でもある。主屋の室内の構成は、祖母と未成年の子供の寝室と家族の活動場所となった主室、及び主室を囲む上室、下室(男性の寝室、貯蔵、炊事など)、後室(貯蔵、臨時の遺体安置など)、前廊(主室と外部の過

渡区域)の4つの付属部分を持っている。主室には儀礼(成人式等)のときにも使われる男柱、女柱や囲炉裏、祖先崇拜や火の神の祭壇があり、象徴的な存在となっている。十分な資料はないが、主室の部屋の配置には、前・後・上・下の接頭語がつく部屋があることから空間の方位観、秩序だての原則の存在が伺われる。

居住棟は、成人した女性には個室(花楼と漢語では表記する)が与えられ、走婚の相手を迎え入れる。男性にも個室が与えられる場合もあるが確実ではない。

以上を総括したモソ人の伝統的な住居空間のモデル図を図2-③に示した。

### 3.1.2 伝統的な集落空間の特徴

ここでは、モソ人の集落立地の特徴、空間構成、住居空間と集落の関係に着目して考察する。

集落の立地について、今回調査した10箇所のナシ族集落は、全て山裾に位置している。壩区出身の熊世軍部長によると、このような立地の特徴は、モソ人が山を神と見なすこと、山裾で防衛機能が備わっていること、山地による生活生産材料の獲得にも平野での生産用地の確保にも意義があることが主な原因ということだった。

信仰空間や共同空間に着目すると、集落の空間構造が理解できる。この集落の自然崇拜のシンボルとなっているのがモソ語で格姆

(ガム)女神山とよばれる集落背後の山である。格姆女神は、集落創生にかかわる伝説の女神であり、その名称から場所の意味と価値が理解できる。因みにこの山は漢語では獅子山と呼ばれている。この山は、モソ人の自然崇拜、女神信仰の対象であり、7月25日には「転山節」という山の神を祀る祭りが盛大に行われている<sup>注13)</sup>。

また集落の出入り口や住居のまよりの結節点と主要道路の交点にはラマ堆が立地している(写真4-②)。ラマ堆は、神像や経文や模様を刻む石で積み上げられた塚状の宗教信仰の意味をもつものであり、様々な大きさがある。ラマ堆と周りの空き地から構成される空間は、格姆女神山と並ぶ集落の神聖領域=信仰区域といえる場所である。

以上のように山裾に立地する者波中村は(写真4-①、図3-①)、北は者波上村、南は者波下村と隣接しており、西方には集落の共有地である牧場と農地が広がっている。整備前の者波中村は、主に住居が立地する居住区域、農業・林業・牧畜業を行う生産区域、主要な交差点に分布する4つのラマ堆(写真4-②)と周辺の空地、自然崇拜のシンボルとなっている格姆女神山から構成された信仰区域として捉えることができる(写真4-③)。また集落前方に立地するサークル状の広場、共同遊牧場も共同空間である。

熊世軍部長によると、このような集落空間の特徴は母系社会の生活習慣及び伝統的な住居

空間の特徴と関係があるということだった。母系社会は家長を中心に家族単位で暮らしており、独立性が高く、他の家との協力関係や交流も少ない。そのため、神聖領域を除き集落の公共スペースはほとんどなく、伝統的な住居の独立性も強い。各住居には経堂があり、自分の家で修行や参拝を行うことができる。また、増築用地の担保、火災時の延焼を防止するための空地が確保されている。予め住宅を建設する時に、住居の間隔を離すことで、個々の住居の独立性が更に強化されることになっている。

以上のように、ナシ族の伝統的な集落は山裾に立地し、主に居住区域、信仰区域、生産区域の3つの区域から構成されていること、家族をユニットとした住居空間の独立性が強いという空間的な特徴が指摘できる(図3-②)。

## 3.2 整備事業に伴う

### 者波中村の集落・住居空間の変容

#### 3.2.1 整備事業の内容

2000年代初期、永寧郷政府の指導の下で、居住環境を



① 主屋(祖母の寝室・家族の集まり) ② 経堂(参拝・若者の修行)  
写真3 伝統的なナシ族住居の空間(巴塔の家)

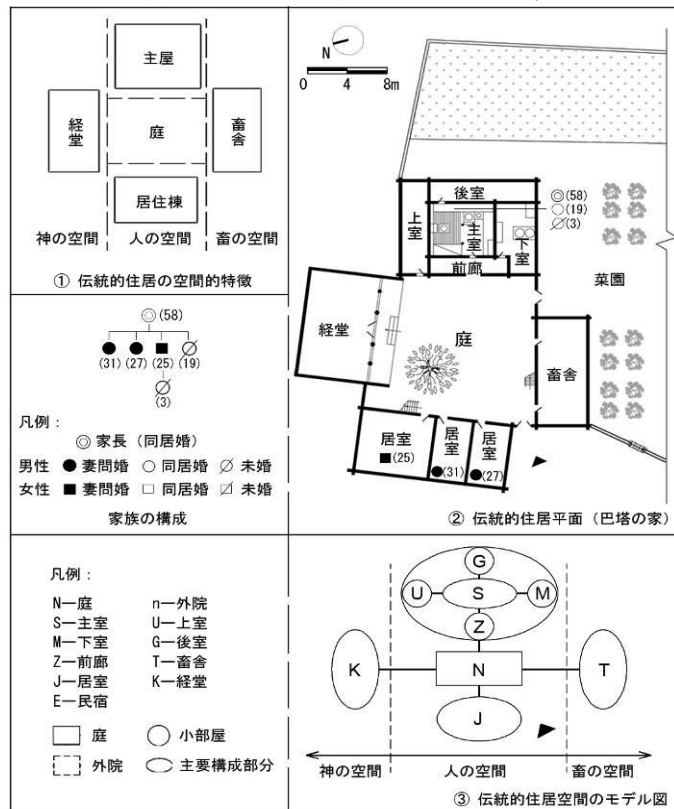


図2 伝統的なナシ族住居空間の分析(巴塔の家を例に)



向上させ、住民の生活を充実させることを目指した居住環境整備事業が始められた。尚、上記の事業・計画は、郷政府主導で行われ、事業費は公共部分については省の経費、住宅や個人経営の売店や住宅の改修、新築等は個人負担となっている。政府への土地の売却や事業導入に伴う補助金は存在しているが、その詳細は一般には公開されていない。

### 3.2.2 集落空間の変容

図3-③には、事業後の集落空間の変化を示した。

集落の整備は、2つの住居群の中間、集落中央にある空き地が対象となり、新たに公共区域が整備されることになった。この公共区域では、伝統的な集落空間の三つの区域の構成を維持したうえで、生活面での近代化や、集落としての共同活動にも対応するよう施設整備が進められた。ここには2軒のレンガ造の売店(写真5-①)、4棟の集会所・公共活動室(写真5-②)が新築・改築され、バスケットボール場(写真5-③)と踊り場が整備された。

### 3.2.3 住居空間の変容

整備事業によって、敷地内の建物配置と主屋の室内空間が変容した。ここでは、郭次の住宅(1940年代建設、2007年改築)を例に説明する(図4-①参照)。

#### ① 敷地の空間構成の変容

衛生的な生活環境となるように「人畜分離」が進められた。分離方法は主に畜舎の前にレンガ造の塀を建て庭を内院と外院に分ける方法で、一般的な家庭を対象に27軒中13軒が整備された(図4-③Ⅰ、図4-③Ⅲ、写真6-①)。次に多いのが元の畜舎を居住棟に改築し、新たな畜舎と外院を住居にする改造で、外部を増築する方法である。このタイプは、富裕な家庭の場合が多く、27軒中6軒を占めている(図4-③Ⅱ、写真6-②)。

#### ② 主屋の室内空間の変容

図4-②に整備事業後の住居空間のモデルを示した。

室内空間の変化は、主屋の採光向上のための改造が多い。利用度が低かった主屋の後室を取り払い、後室の扉を窓に改造した事例が多い(15/27例、図4-③b)。



写真4 整備前の者波中村の集落空間の特徴



写真5 整備事業による者波中村の空間変容

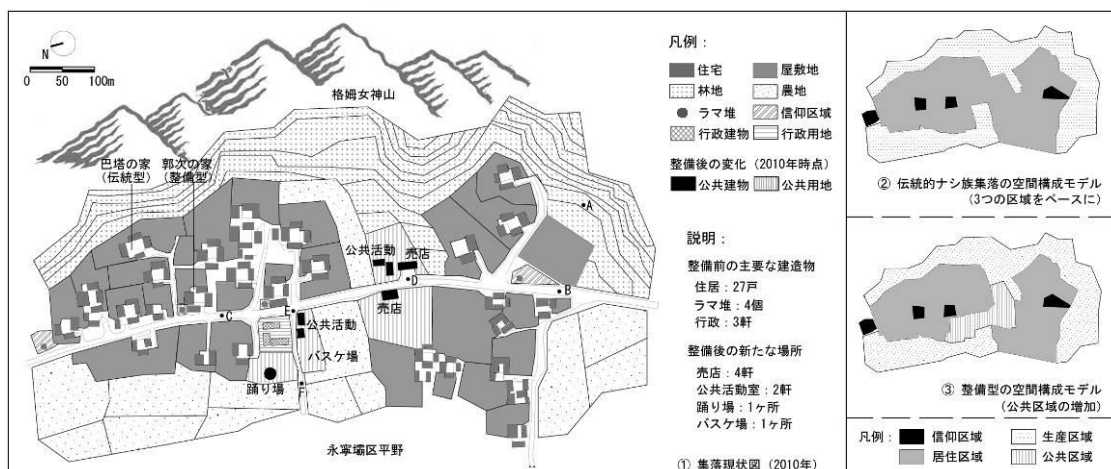


図3 者波中村の集落空間の変容分析

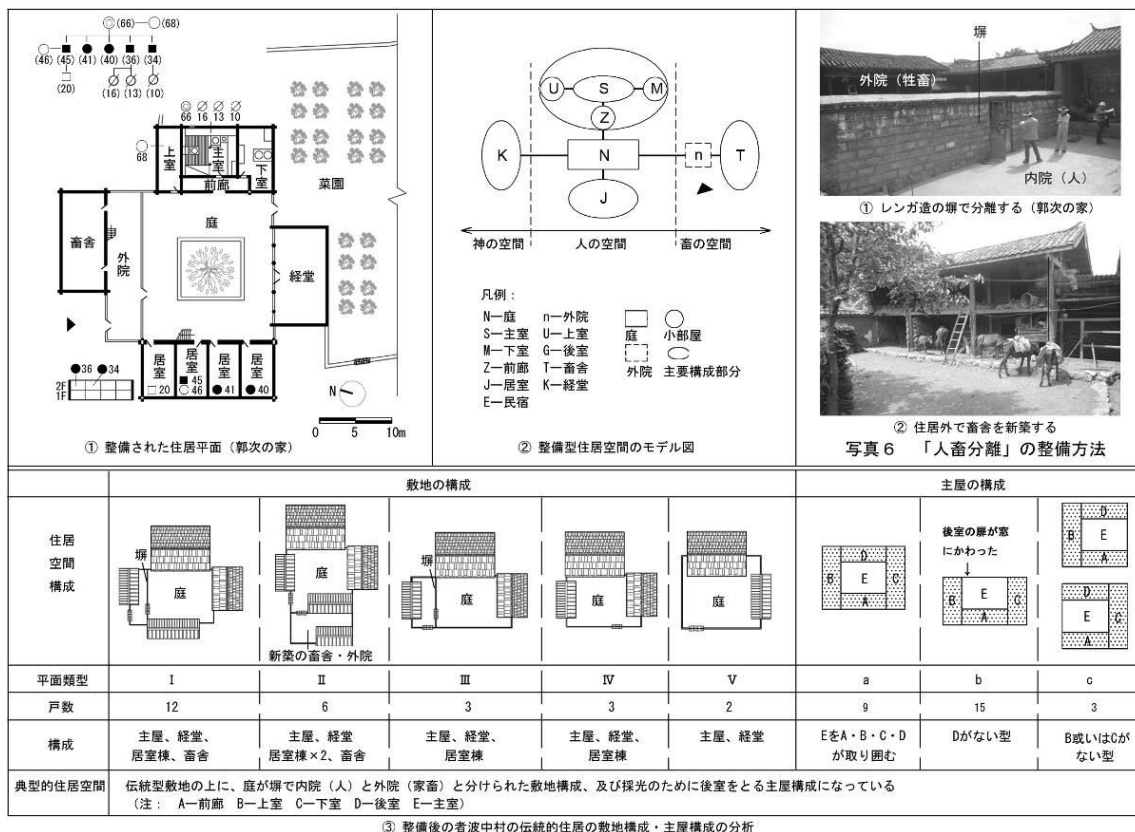


図4 整備された後の者波中村住居の空間分析

この改造では、後室は行事（主に葬儀）にとって意義があることに配慮し、行政の強制的な整備は行われなかった。村幹部の家をモデル的に改造し、その利点を住民に見せることによって、住民が自発的に改造を促すという方法がとられた。

#### 4. 観光開発による 里格村の集落・住居空間の変容

##### 4.1 開発前の里格村と保護開発計画の策定

###### 4.1.1 開発前の集落空間構成

里開発直前の里格村（2003年）を写真7、図5-①に示した。里格村は、者波中村の山を隔てた南側に位置している。

集落の南に位置する湖は、モン語で「シナミ（母なる海）」と呼ばれている（漢語では「瀘沽湖」）。北に位置する山は、「格姆（ガム）女神山」であり、者波中村の信仰となる山とは同じである。湖も山も、モン語の言葉には信仰や伝説に関わる意味がある。

集落の空間構成は、居住区域、信仰区域（三つのラマ堆がある）、生産区域（農地を主とする）の三つの区域と行政用建物（4軒）のほか、民宿、飲食店といった観光施設が立地するエリアから構成されていた。

住民へのヒアリングによると、開発前の里格村の主な収入源は農業であり、観光業は副収入であった。郷政府の事業が導入される前には、観光関連施設の殆どは住民

が自発的に建てたものであった。

図5-②は、2003年当時、開発前の里格村の空間構成を模式化したモデル図である。既存の三つの区域を基本に、山裾には伝統的な住居が維持され、湖岸部分では住居が拡張されるかたちで周辺に増築された観光関連の建物が立地していた。

###### 4.1.2 清華大学の集落保護開発計画案

2004年に永寧郷政府と瀘沽湖管理委員会が清華大学建築系、天地都市建築設計有限公司に依頼し、自然環境保護、観光開発を主にナシ族文化の保護にも着目した集落開発計画案と住居設計案<sup>13)</sup>を策定した。この計画案は保護と開発という課題に対する回答案という性格をもつもので、郷政府によって実現した。

この集落保護開発計画案の内容は以下の通りである。

- ①環境保護の面において、汚水の排出で瀘沽湖が汚染されたことと、雨期に瀘沽湖の増水で集落が水害を被っていたことに対して、集落（湖岸部の住居）を山のほうに移転させ、沿岸部を湿地に整備し、先進的に下水処理システムを取り入れることによって、湖水の汚染及び集落の水害を解決する案となっている。
- ②湖岸部分の住居移転は、湖岸の自然保護の面が重視された結果と見なせるが、伝統的な集落・住居空間や伝統的景観を崩す結果になった。移築された住居は、伝統的なナシ族の住居の特徴を継承する配慮がなされているが、観光に重きを置いたものに変化している。

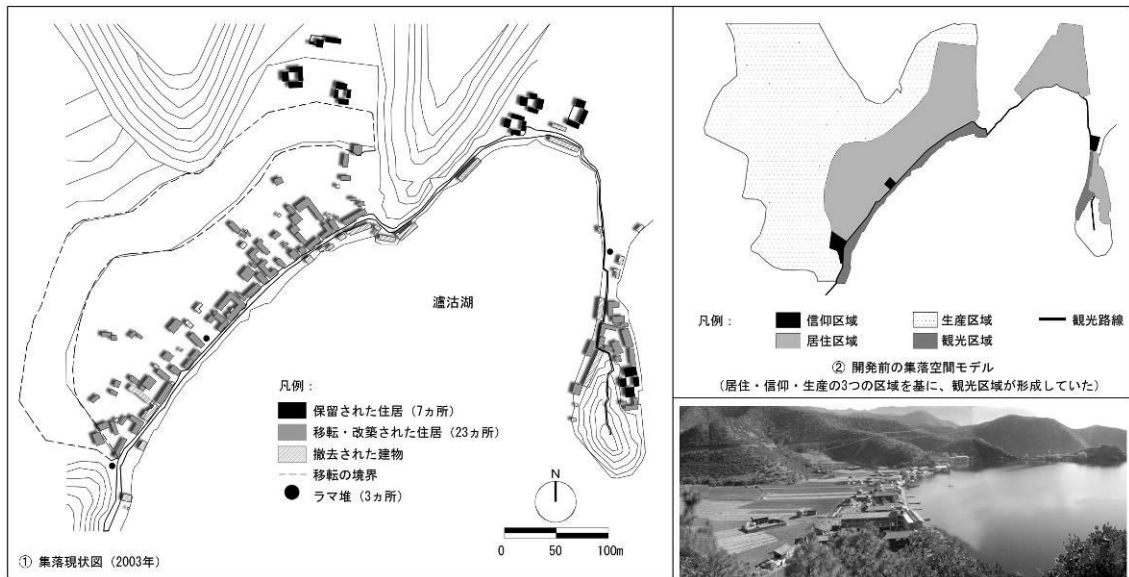


図5 開発前の里格村の集落空間 (2003 年)

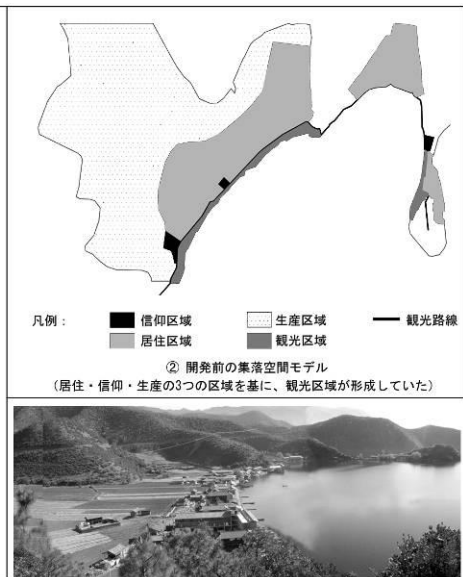


写真7 開発前の里格村 (2003 年)

③観光開発の面において、観光施設を集中的に設置し、湿地と集落の境界に沿って遊歩道を整備した計画となっている。また、行政・事務用建物は観光管理の機能を加え、設置されている。

④インフラ建設の面において、インフラ整備が遅れており、観光発展に対応できるよう供水、電力、通信などのインフラ施設が整えられ、更に、外部と結ぶ道路交通を改善し、内部の道路も整備されている。

## 4. 2 観光開発の実施と集落空間の変容

### 4.2.1 観光開発の経緯

実際の開発工事は、2004 - 2009年に実施され、以下の順序で進んだ。

#### ①住居の移転と新築

湖から離れ山裾に立地していた7世帯の伝統的な住居は維持されたが、湖岸に面して立地していた他の23世帯は撤去・移転された。新たな住居は、沿岸部から山裾の方へ80mほどの場所の造成地に移転させ、新たに整備された遊歩道に沿って4つのグループに分けて住居群が建設された。遊歩道は集落の新たな主軸となる主要道路で、道に面してかつてミセが立ち並ぶように整備された。住宅は居住専用から、居住棟が家族の居室からミセや観光客用の居室へと整備された併用住宅へと変容した。新たな居住と観光一歩の機能を合わせた住居設計案は、清華大学によって提案されたもので、23世帯の住居が新築された。

#### ②湖水の保護

汚水処理及び雨季の排水を解決するため、清華大学によって設計・製造された国内の最先端の下水処理システムが取り入れられ、二か所の水処理施設も整備された。

#### ③観光施設、管理施設の建設

住居を移転した後の湖岸区域は湿地帯として整備され、

ナシ文化展示館、計画資料館、民宿などの観光施設も集中的に整備された。また、行政・事務管理用施設が観光管理機能も併せ持つ施設として建設され、駐車場と共に行政区域を形成することになった。

#### ④インフラ建設。

主に電力、ゴミ処理、通信施設、及び観光を支えるインフラが建設・改善された。

完成後(2010年)の集落空間を模式図にまとめたのが、図6-①で、その景観を写真8に示した。

者波中村と異なり、里格村の新しい住宅は家族の居住専用ではなく、観光客の宿泊に配慮されている。また観光施設が集落中央に集中的に設置され、中心機能をもつ観光区域が整備された。さらに行政・管理用の事務用建物が、観光管理にとっても重要な働きを担うことから、その一帯が管理区域として整備されることになった。

開発後の里格村の集落空間は、居住区域、信仰区域、生産区域に、観光区域(行政管理区域を含む)に加わった構成になった。図6-②には開発後の集落空間構成モデルを示した。

### 4.2.2 住居の整備と空間変容

開発前には、店舗や民宿などの営業機能を加えて改造された住居がよく見られていた。それに対し、清華大学の設計者によって伝統的住居様式を維持しながら、営業と居住の機能が含まれた住居案が出された。移転された23世帯の住居は、この住居案を参考にして新築された。ここでは、阿尼の家(1940年代建設、2007年移転・新築)を事例に考察を行う(図7-①)。

敷地構成の変容について、経堂と畜舎が消滅し、神・人・畜の空間区分の代わりに、営業と家族生活の二つの部分に区分されることになった。

遊歩道に面した元の経堂、畜舎が喫茶店、民宿、娯楽室へと改造された。使用機能の変化に伴い、外壁に窓を



設け、階高も上げた。それに、拡大された部屋を支えるため、従前の累木式構法のほか、柱梁構造も合わせて使用されることになった。

家族生活の部分は、主に主屋と居室棟の二つがある。撤去された畜舎は小さな附属棟として再建され<sup>注10)</sup>、「人畜分離」の方法で主屋の傍に設置されている。また、衛生面での更なる改善を行い、観光客に好印象を与えるため、トイレと浴室も分離され、主屋の傍に独立して設置されている。更に、伝統的ナシ族の住居に重要な地位をもつ経堂が、居室棟に合併され、ただ一室に縮小されることになった。

間が拡大された。敷地構成は対外向けの営業と家族生活の二つの部分に区分され、経堂は居室棟に合併され、畜舎が小さくなって主屋の傍に設置された。さらに主屋の構成は、後室が主室の一部分になる傾向がみられた。

## 5. 住民意識の変化と文化への誇り

整備事業・観光開発を評価するために、住民の意識の変化を把握することにした。ここでは者波中村と里格村において、それぞれ20戸を調査対象に選択し、問1「事

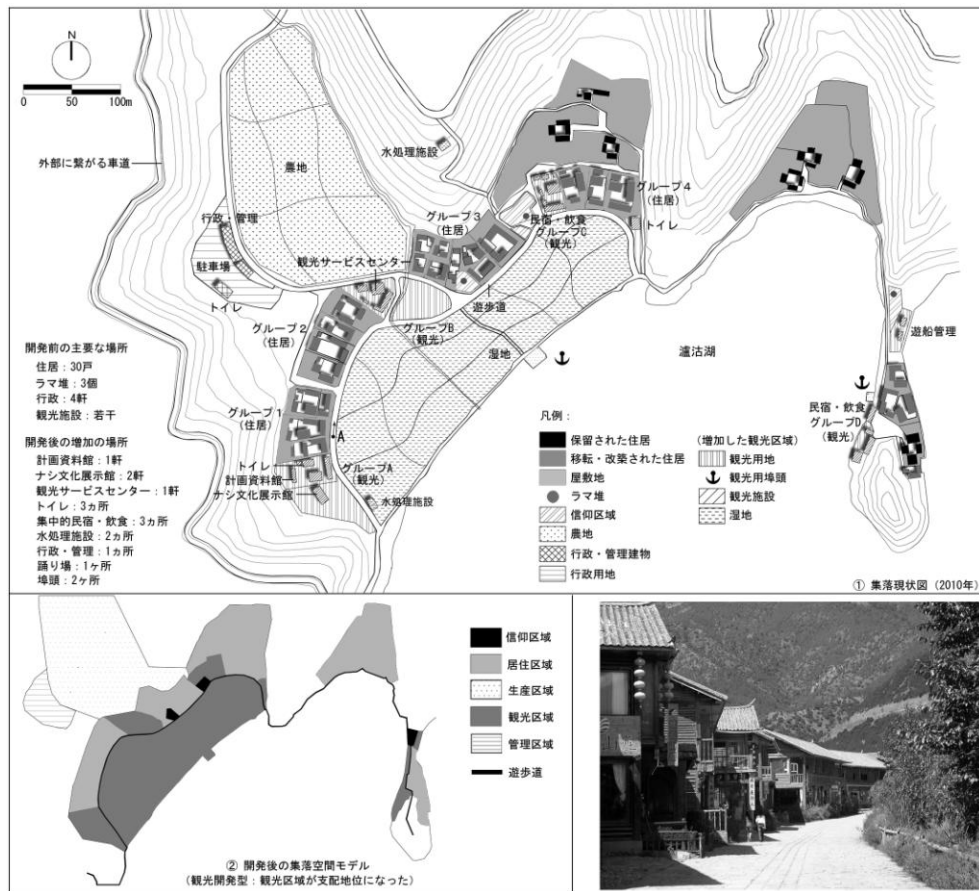


図6 開発後の里格村の集落空間 (2010年) 写真8 里格村の居住地と遊歩道 (図6-①のAにて撮影)

主屋について、上室、下室、後室、前廊によって主室を囲むという伝統的な主屋の構成を持つ事例は10例 (図7-③a、保存された7世帯が全てこのタイプ) あるが、後室の利用度を上げ、採光向上を図るための住居設計案の通りに、後室を主室の1部分になった事例が一番多い (13/30、図7-③d)。そのほか、後室を取り払う場合が5例あり (図7-③b)、上室或いは下室がない場合が2例ある (図7-③c)。

以上の分析結果を集約し、図7-②に里格村の住居空間モデルをまとめた。神・人・畜という伝統的空間区分において、神・畜の空間が縮小され、人の空間、営業空

業を実施した後、居住環境と生活様式に変化があるか。伝統文化は維持されているか、問2「母系社会、妻間婚を代表とした社会制度 (生活や文化面) の変化があるか」という設問を設けインタビュー調査を実施した。表1は、その結果を示している。

問1 (環境・生活面での変化—伝統的文化の維持) に対する意識について、者波中村の住民は、全て「一般 (普通)」、「小さい」を選択した。その理由は、「『人畜分離』や公共施設の設置で集落の空間や場所の変化は認識しているが、伝統的居住環境、生活様式行事などはあまり影響していない気がする」と答えるものが多かった。



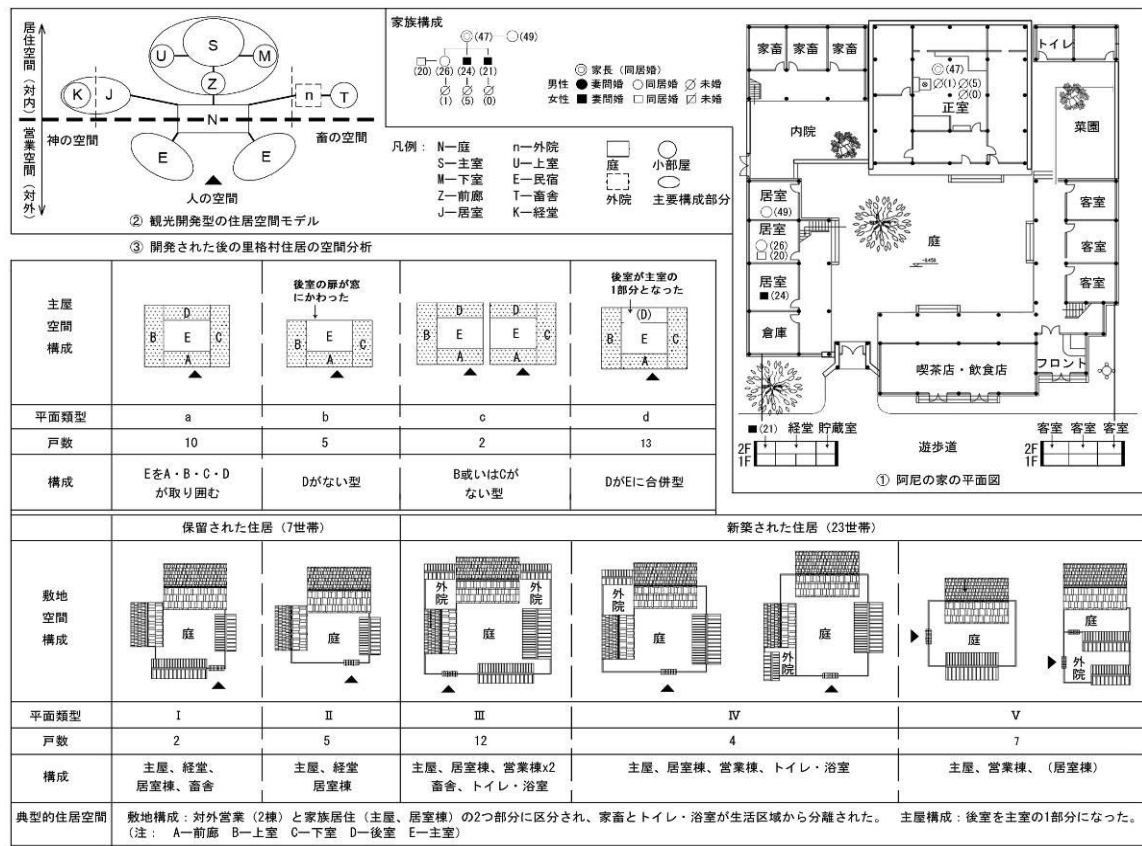


図7 開発後の里格村における住居空間の分析

表1 事業導入後の伝統文化・社会制度に対する意識の変化

伝統文化	者波中村	里格村	社会制度	者波中村	里格村
非常に大きい	0%	35%	変化なし	75%	20%
大きい	0%	30%	少し変化	15%	70%
一般	85%	35%	変化ある	0%	5%
小さい	15%	0%	不明	10%	5%

一方、里格村では、「非常に大きい」と「大きい」が65%を占めており、「観光開発で集落と住居の空間や環境、日常生活の様式がずいぶん変わった」と答えている。

社会制度に対する意識の変化は、者波中村の住民が殆ど「変化なし」と選択し、整備事業による社会制度への影響は少ない。里格村の住民が予想外に、「変化なし」と「少し変化」を選択した住民が多く、90%を占めた。それに対して、「母系社会の生活様式がナシ族のシンボルであると考えられ、そこに誇りの気持ちを持っている。開発後、主な収入が観光業からもらえているので、民族のシンボルが維持されなければ、観光客への魅力がなくなってしまう」という理由を答えた住民が多かった。この結果は、住民が意識の変化を感じているが、民族の誇りや観光収入を守るため、社会制度を維持しようとする事が把握できた。

インタビュー調査の通り、整備事業が実施された後の者波中村は、住民の伝統的文化、社会制度に対する意識

はあまり変化していない。一方、観光開発の実施によって、里格村の住民が伝統的文化に対する意識が大きく弱まる一方で、社会制度を意識的に維持しようという傾向が見られる点は興味深い。

## 6. 整備事業・観光開発事業に対する評価

集落・住居の伝統的空間構造との関係、及び住民の事業や伝統文化や社会制度に対する意識の変化から、二つの事業の内容を把握し、評価する。

### 6.1 者波中村の整備事業の評価

整備事業が行われた者波中村では、売店、公共活動室、運動場といった公共施設が整備された。これらの施設は集落の中央に立地し、公共区域が形成されることになる。集落域全体の空間構成は、基礎的区域である居住・信仰・生産の三つの区域が維持され、家族をユニットとした住居の独立性、単位性も維持されている。

住居についてみると、居住環境の向上、生活の現代化への対応が図られ、塀で畜の空間を人・神の空間と分離され衛生上の改善がなされている。

住民の意識面に着目すると、整備事業実施後、伝統文化、社会制度に対する変化は少なく、伝統的意識は安定し維持されていると判断できる。

## 6.2 里格村の観光開発事業の評価

観光開発事業の実施によって、里格村では湖岸の旧住居群の撤去と自然環境の再生、旧住居群の移転に伴う新居住域の整備、新たな観光と行政管理機能を担う行政区域（公共区域）の整備、新居住域と湖岸湿地帯の間の遊歩道の整備が進められた。ここでは湖岸の自然保護に対する回答として住居群の撤去という強硬手段が取られ、伝統的な民家景観の保全については伝統型の新住宅の建設が行われた。

自然保護、民家の現代化・観光化・景観復元という目標は達成されたようにみえるが、何れも既存環境の保全を前提としない新規の開発である点に特徴がある。また集落レベル、住居レベルのいずれにおいても、観光と居住が一体となった整備、特に観光優先で生活が従属している傾向がある。

住居に着目すると、牧畜業の衰退による畜の空間の弱体化傾向が顕著に表れ、さらにナシ族住居にとって大切な神の空間（経堂）が極端に縮小される傾向にある。住居および敷地構成は、神・人・畜の共存空間から、観光客の宿泊や商売などの商業空間と家族生活の併用空間へと変わっている。

今回は、湖岸地区の住宅は、すべて解体され、移築により保存するという手法は取られていない。すべての住宅は伝統型住宅の新築で、その結果、伝統的な民家景観を復元しようとした点に特徴がある。

湖岸部分の移転によって新たに形成された居住区の景観は、新たに建設された住宅が、伝統的な外観を採用したことによって一見継承につながっているようにみえるが、それは伝統のイミテーションであり、またそれを担保する法的根拠がないのが現状である。

住民の意識面に着目すると、観光開発事業後、物的な変化が認識される一方、伝統文化、社会制度の変化に対する変化の認識は低い。むしろ、インタビュー調査の過程で、モソ人の母系社会を中心とする社会制度や文化に対する誇り、維持意欲が強いことが明らかになった。

## 6.3 保護手法の比較と評価

二つの事業の特徴を比較すると、伝統的空間構造を基礎にして整備を進めた者波中村と、伝統的空間構造を大きく改編した里格村の違いが明確である。

前者の者波中村での事業は、既存の住空間、集落空間の空間構成パターンを継承するもので、住居の独立性、居住区域、生産区域、信仰区域が保全されている。住居については主に衛生面からの改善がなされ、集落では行政や生活の共同化・近代化の側面から公共区域が整備された点に特徴がある。伝統的な空間構造の継承、住民意識の変化からみて、この事業の成果は評価することができる。

後者の里格村の事業は、湖と湖岸の自然保護が優先され、民家の伝統的景観の形成が図られたが、既存の住宅の保存や集落空間の伝統的な空間構成は保存には配慮されなかった。湖および湖岸の自然保護は達成されたが、湖岸に住む人々の湖との関係は大きく変容した。また湖岸の伝統的な民家は保存されず、伝統的な住宅デザイン

をもつ民家の復元的新築となった。当初伝統的集落の保護、建築の外観や集落景観の保護が重視されたが、結果は、集落・住居空間や室内空間が大きく変化した。住居、集落の空間構成は、ともに観光化への対応を基本に、住居は併用住宅に、集落は観光用の遊歩道を中心に集落空間が再編されることになった。観光化は、住民に対して物的変化を強く認識させる結果となったが、ナシ族の母系社会や伝統文化に対する誇りも同時に強めた。この点は注目に値する。

## 6.4 里格村の地域運営・社会組織

今回の我々の調査では、家族や集落の社会構造に関する調査は十分ではなかった。特に集落の共同性や社会組織の実態把握は不十分であった。その点を近年現地を調査した遠藤織枝や金龍哲の文献<sup>注14)</sup>、金縄初美の文化保存活動と観光化に関する論文<sup>注15)</sup>で補っておきたい。

集落には生産隊長、村長がおり、鎮には鎮長がいる。彼らは地域社会の運営にあたっているが、生産面、生活面での共同性はイエが中心ということで、強固な地域組織ではないということだった。しかし、永寧郷のモソ人は、自分たちの母系社会やその文化に対する誇りとその存続に対する意識が強く、それを守るのが村長、鎮長の役割と意識されているという。また金縄が紹介している洛水村では、村長を中心に10人で構成される村委員会が、独自の「村規民約」を制定し、さらに観光に関する協同事業を実施・運営している<sup>注13)</sup>。

2000年代に実施された整備事業や観光開発事業は、住居レベルと集落全体レベルの事業が導入された。事業導入前後では、観光と生活という側面と、家族と集落という側面での変化が著しい。筆者らが調査した2010年には、明らかに集落の共同性は生活面、観光面、意識面において強化されているといえる。

観光化の進展は、行政と観光のかかわり、集落と観光のかかわりをも変化させている。新たな公共区域の整備はその反映でもある。観光を中心とした地域運営、地域経営における行政、集落の役割、位置づけは重要である。

今回の調査では十分把握できていない部分も多いが、独自の伝統文化や社会制度に対する誇りと保護意識の存在、今後の住民組織の保護計画・管理への参画、地域運営の共同化の素地、可能性は確認できた。

## 7. まとめ

本稿は、雲南省永寧郷の者波中村、里格村を対象に、モソ人の伝統的な集落・住居の空間構成とその特徴、及び整備事業・観光開発事業に伴う集落・住居の空間変容と住民意識の変化を明らかにし、二つの事業を空間面・社会面での伝統文化の継承という視点から評価した。

最後に本稿で明らかになった知見、少数民族の歴史文化村鎮の保護について考察を加え、まとめとしたい。

### ①伝統的モソ人の集落・住居の空間構成

モソ人の住居空間は、主屋、経堂、居室棟、畜舎で庭を囲む敷地構成、主室、上室、下室、後室、前廊で構成

された主屋構成に特徴がある。また神の空間（経堂）・人の空間（主屋・庭・居室棟）・畜の空間（畜舎）が共存し、信仰・生活・生産の機能が住居内の基本的な空間構成に対応していることがわかった。

モソ人の集落空間については、自然崇拜・信仰の対象となる山（女神山、獅子山）の裾野に立地し、居住・信仰・生産の3つの区域をベースに集落域が構成されていること、居住域は、母系家族に対応する独立性の高い住居空間と隣接する菜園、空地によって構成され、集落の出入り口や中心の主要道にラム堆が立地し、秩序化されている。

#### ②事業に伴う集落・住居の空間変容とその評価

者波中村の整備事業では、集落空間に公共区域が形成され、住居空間では人畜分離が進んでいるという変化が明らかになった。ここでは従来からの集落の居住・信仰・生産の3つの基本的区域や住居における家族をユニットとした空間的特徴、住居の神・人・畜の空間共存関係も維持されている。また空間変容が進む中で、住民の伝統文化や社会制度に対する誇り・意識は安定しており、者波中村の集落・住居の伝統的空間構造の維持にもつながっていることが明らかになった。

一方、里格村の観光開発事業では、湖岸に立地していたすべての住居が内陸に移転（新築）され、湖岸の自然環境が再生・保護された。ここでは従来の集落の空間構造が改変され、新たな居住区域に伝統的な形態・外観の住宅が建設され、主要道もプロムナードとして整備された。集落の伝統的空間構造も大きく変容し、住居レベルでも、道に面する家族用の居住棟は客室、ミセの観光用へと変化した。また経堂が一室に縮小された事例もあり、神の空間の弱化がはっきり表れている。観光化の進展と住居・集落空間の観光を軸とした整備、変容が進むなかで、母系社会の維持、モソ人の文化に対する誇りや意識が強まる傾向があることがわかった。

#### ③少数民族の歴史文化村鎮保護の今後

中国で近年確立された歴史文化村鎮の保護制度とその対象となる村鎮の保護計画について、①保護対象の建物、地区の形成過程や地域の空間構造における位置づけが不明確なこと、②行政主導で計画策定がなされ、地域住民の計画段階、その後の運営段階での参加システムが確立していないことを指摘してきた。さらに今回の調査の過程で、歴史文化村鎮制度の申請に際して規模条件が存在していることが判明した。村の場合、2500㎡以下では制度の適応をうけられないということだった。

小規模な集落の保護には、周辺の集落と一体となった地域を単位に広域区域として指定をうけ、具体的な整備事業の導入は、集落を単位とする重点地区として実施するといった保護制度の整備が必要となる。現時点では、小規模な歴史文化村鎮の保護は制度的な壁がある<sup>注16)</sup>。

歴史文化村鎮保護において、集落と郷政府、さらに県、省との連携システムの確立が急務である。また実際の保護計画の策定、整備事業の導入、その後の管理・運営において住民および地域の参画とその組織的整備が重要である。その際、空間的にも社会的にもまとまりの単位となっている村（集落）組織の育成・活用が重要である。

その際、生活の現代化、居住環境の向上、観光化への対応といった直面する問題を解決し、同時に独自の文化や社会制度の維持、集落景観や自然環境の維持を図る計画、制度、運営組織の整備が必要である。

保護計画を進めるうえで、まず住民の伝統文化や生活文化、生活様式の尊重、誇りを確認し、それを育成することが基本である。

集落全体の整備とそれに関連する地域の住民組織や空間構造の維持・発展を目標に、保護計画策定に際して、伝統的な住居・集落空間の構成原理と近年の変容動向を把握・検討する基本調査が必要である。その結果を踏まえて、伝統的な空間構成、景観形成の基本原理解を探索・確認し、現代の生活面、観光面での新たな要求への対応が必要となる。

具体的には観光化に対する住居や集落空間の整備と日常生活に対応する住居空間や集落の調和ある整備が大きな課題となる。その際、共同施設の整備、施設・行政施設が立地する中心エリアの整備が課題であり、伝統的な集落空間の基本構成との調和・調整が必要で、住宅および施設、集落景観に関するデザインガイドの設定も課題となる。

【謝辞】 重慶大学建築城規学院の周鉄軍教授には現地調査の機会を戴きまして、謝意を表します。また現地でお世話になった寧蒗県政協の和建華主席、寧蒗県宣伝部の熊天兵部長、永寧郷武装部の熊世軍部長、本稿作成にあたってご協力いただいた神戸大学大学院工学研究科建築学専攻の山口秀文先生にもあわせて謝意を表する次第です。

#### Note

- 1) 歴史文化村鎮は、「歴史文化名鎮名村」とも呼ばれている。村鎮とは、農業を主な産業とする農村地域の総称で、村落、集落とも呼ばれる。集鎮とは、より大きな集落をベースに、交通の便の良さから生じた定期市或いは商品の集散地から発展してきた、農村と都市の特徴を持つ地区である。村鎮は中国の農村地域の基礎単位となるため、村鎮の保護は農村地域における文化財保護の基礎となっている。また、中国での「保護」という用語は、「保存」「保全」の意味を兼ねている。「点」的制度も、「面」的制度も「文化財保護」と呼ばれている。
- 2) 2008年に中国国務院科学技術部の下で、住建部、国土資源部、教育部、及び国家標準委員会が合同の研究プロジェクトを立ち上げ、「歴史文化名鎮名村保護計画技術研究」（名鎮名村の保護計画の策定方法と技術に関する研究、課題番号：2008BAJ08B02、代表：華南理工大学、肖大威教授、2008）をスタートさせた。この課題は華東、華南、西南、西北の4つの地域に分けられ、それぞれ同済大学（代表：邵甬教授）、華南理工大学（代表：肖大威教授）、重慶大学（代表：周鉄軍教授）、西安建築科技大学（代表：刘克成教授）が担当している。神戸大学山崎研究室は、重慶大学周鉄軍研究室の西南地方の研究に参加



- することになり、共同研究を進めることになった。
- 3) ナシ族とモソ人の区別は、参考文献5)に記述されているが、本稿での対象はモソ族の集落であり、ナシ族（中国の56の民族の一つ）に属する。近年、中国の文献と著作では用語を標準化しようになっているため、「モソ人」は徐々に「ナシ族」という表現に変わっている（例えば、「雲南民居（1986，第一版）」では「モソ族民居」の部分が独立しているが、「雲南民居（2009，第二版）」では「ナシ族民居」の部分に配属されている）。本稿では「モソ人」を用いる。
  - 4) 周尚意・孔祥：文化地理学，高等教育出版社，2010。西南地方は、中国における少数民族の個数・人口の一番稠密な地区である原因を論述した。
  - 5) 例えば、楊福泉：納西族文化史論，雲南大学出版社，2006。Oppitz・Michael・Elisabeth Hsu：Naxi and Moso Ethnography-Kin, Rites, Pictographs, Cambridge University Press, 1998
  - 6) 「雲南民居（1986，第一版）」は雲南省における様々な民居についての初めての調査研究であり、民居の種類と主要な空間に注目したものである。「雲南民居（2009，第二版）」は、歴史発展、住居空間の特徴、使用している材料、建造技術などに着目して、主要な雲南民居のタイプを詳しく論述しているものである。
  - 7) 浅川滋男：住まいの民族建築学，建築資料研究社，1994、
  - 8) 浅川滋男・井上えり子他：雲南省ナシ族の母系社会の居住様式と建築技術に関する調査と研究、丸善、1996
  - 9) 井上えり子：ナシ族の住居の空間構成—中国の古羌系民族の住居と集落に関する研究 その3，日本建築学会計画系論文集，No.539，pp.111-118，2001.1
  - 10) 中国政府は郷（鎮）の下に行政村という行政レベルを設置しており、それは隣接するいくつかの自然村（集落）によって構成されている。また自然村は、行政村の委員会（村民委員会）によって管理されている。
  - 11) 中国の国家級自然風景名勝区とは、観光、文化、科学の価値を持っており、自然景観、人文景観がより集中し、美しい環境があり、観光或いは科学・文化活動をすることができる区域を指す。
  - 12) 妻問婚とは、婚姻の一種で、夫が妻の下に通う婚姻の形態のこと。走婚、招婿婚ともいう。母系制度の伝統のある社会など母権の強い民族に多く見られる婚姻形態で、普通、子は母親の一族に養育され、財産は娘が相続する。
  - 13) 文献13参照。
  - 14) 文献10)、文献11)参照
  - 15) 観光化に対応するため村民委員会が中心となって村規約を定めた集落も出現している。文献12)、13)に詳しい。

- 16) 歴史文化村鎮は、中国の文物保護法（制度）の対象となる歴史文化名鎮名村である（以下、名鎮名村と略す。）。歴史文化村鎮には、保護級別に国家級と省級があり、名鎮名村の保護制度の適応を受ける歴史文化村鎮は、「歴史文化名城名鎮名村保護条例」の関連規定に従って保護政策が適応される。しかし現行制度には規模の基準が設けられており、小規模集落はその適応から外される場合がある。その場合、地方政府が独自に保護や開発の方針を定めるのが一般的であり、法律の規制がない。

筆者等の2010年調査時には、里格村は省級の歴史文化村鎮の指定を目指していた。しかしその後世界遺産指定へと目標を変更して村鎮保護に進めることになった（2013年担当者からのヒアリングによる）。

## References

- 1) 馮旭，山崎寿一：中国における歴史文化名鎮名村保護制度の展開とモデル計画事例に関する考察—1980年以降の「面」的保護に着目して，日本建築学会計画系論文集，No.684，pp.373-382，2013.2
- 2) 科技部，住建部，国土資源部，教育部，国家標準委員会：‘十一五’国家科技支撑計画重大项目—農村住宅計画設計与建設標準研究課題指南，2007
- 3) 国家科技支撑計画子課題任務書，研究課題番号：2008BAJ08B02-2，研究代表者：肖大威 周鉄軍，2008～2012年度
- 4) 国务院法制辦農業資源環保法制司，住房与城鄉建設部法規司，城鄉規劃司：歴史文化名城名鎮名村保護条例，知識産権出版社，2009
- 5) 雲南省設計院（編）：雲南民居，中国建築工業出版社，1986
- 6) 楊大禹・朱良文：雲南民居，中国建築工業出版社，2009
- 7) 吳正光，陳穎，馬薇：西南民居，中国建築工業出版社，2010
- 8) 浅川滋男：住まいの民族建築学，建築資料研究社，1994
- 9) 清華大学建築学院，北京天地都市建築設計株式会社，麗江瀘沽湖観光区管理委員会：里格民族観光村環境整備計画，2004
- 10) 遠藤織枝：中国雲南摩梭族の母系社会、勉成出版、2002.4
- 11) 金龍哲：結婚のない国を歩く—中国西南のモソ人の母系社会、大学教育出版、2011年
- 12) 金縄初美：中国雲南省・瀘沽湖における観光化と民族意識の相互作用、北九州市立大学『外国語学部紀要』、2012
- 13) 金縄初美：中国雲南省モソ人の文化保存活動とアイデンティティ、東アジアへの視点、2012年9月号、国際東アジア研究センター

**Research on Conservation Approach on Historic Village of the Naxi  
Nationality in Southwest Region of China  
- Take Zhe Bo Centre Village, Li Ge Village in Yongning Town, Yunnan  
Province for Example -**

Xu FENG<sup>1</sup>, Juichi YAMAZAKI<sup>1</sup>

<sup>1</sup>*Graduate School of Engineering, Department of Architecture*

**Key words:** Historic Village (Town), the Naxi Nationality, Improvement Project, Tourist Development, Spatial Structure of Village, Conservation Approach

Taking Historic villages of the Naxi nationality (one group named Moso) in Yongning Town, Yunnan province of southwest region of China, this paper, ①the traditional spatial structure of village and residence are cleared, ②space variation of village and residence, and awareness of residents are researched to inspect the influence caused by improvement project and tourist development which are implemented in recent years, ③evaluation is carried out on two projects, then conservation approach based on traditional spatial structure is discussed.